近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第二十七回）

「六田（むつた）の川」

・「六田の川」は奈良県と三重県の県境にある日本有数の多雨地帯として知られる大台ケ原を源流とし、深い淵や早瀬と様（さま）を変えながら町中などを曲流しつつ北西に流れる清流・吉野川が奈良県のほぼ中央部に位置する南岸が吉野郡吉野町六田（むだ）と北岸が同郡大淀町北六田（きたむだ）との間あたりを流れる川を「六田（むつた）の川」と称し、その淀を「六田の淀」と呼んでいた。

・万葉集にはこの六田の川を詠んだ次の歌がある。

1）かはづ鳴く　六田の川の川柳（かはやぎ）の
ねもころ見れど　飽（あ）かぬ川かも

作者未詳（巻九―一七二三）

（解説）かじかの鳴く六田の川の岸辺の川柳の根のように、ねんごろに見ても見飽きない川であることよ。と褒めたたえている。

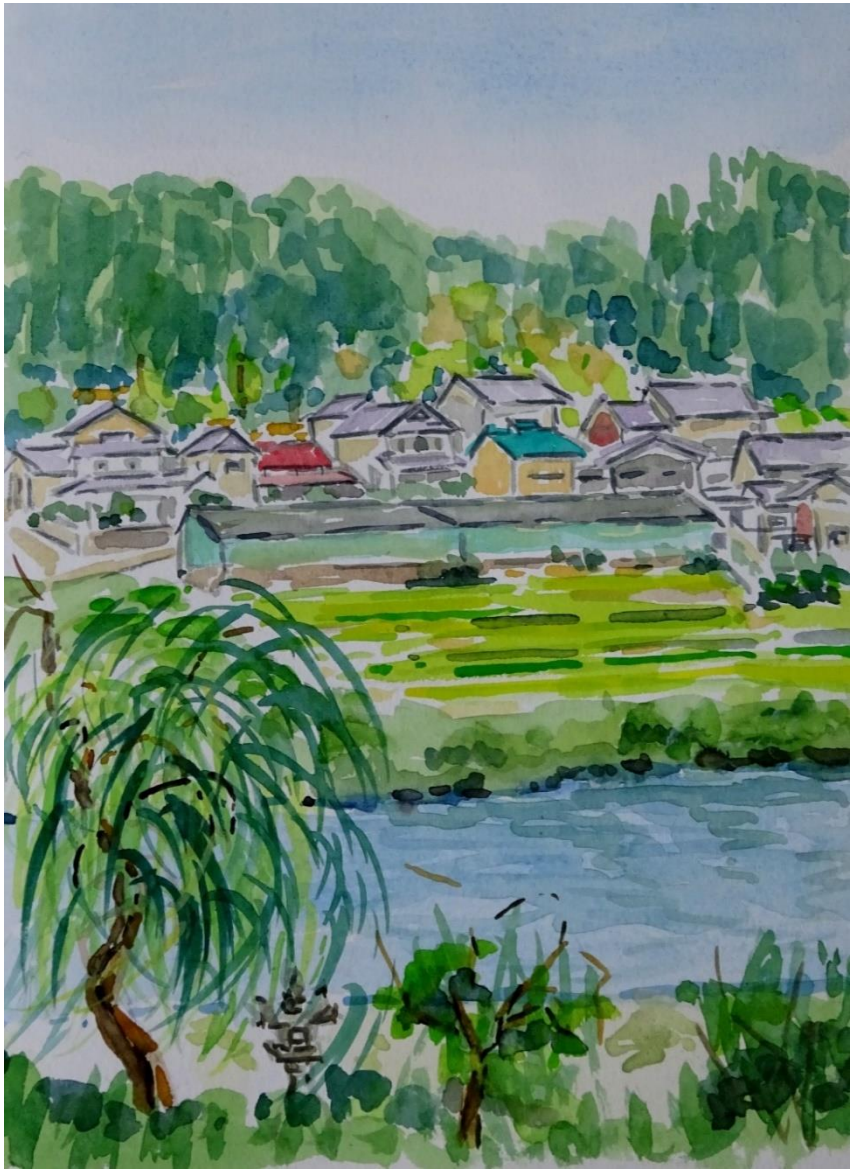
・「かはづ」は河川上流部の渓流に生息し皮膚はほとんどが灰褐色のアオガエル科「カジカ（河鹿）ガエル」のことを指す。オスは笛のような高く美しい声で鳴くことから清流の歌姫とも呼ばれている。

2）音に聞き　目にはいまだ見ぬ　吉野川

六田の淀（よど）を　今日（けふ）見つるかも

作者未詳（巻七―一一〇五）

（解説）噂に聞いて直接にはまだ見なかった吉野川の六田の淀みを今日こそは見たことである。前歌をふまえた歌であろうか。

（参考文献）・米田勝「万葉を行く」・日本歴史地名体系「奈良の地名」等

（写生地）吉野川の通称「六田の淀」は大淀町北六田と対岸の吉野町六田を結んでいた渡しの淀のことで渡し場には川柳が多かったことから「柳の渡し」と呼ばれた。北六田にある渡し場の跡地にある柳と吉野川（六田の川）、対岸の吉野町六田の集落風景を描く。（杏花）